

愛知県岡崎市和志取神社蔵女神像について——近代式内論社と文化財——

長谷洋一

はじめに

平成二十二年春、資料調査のために東京を訪れた筆者は、同級生でもある宮内庁書陵部陵墓課首席研究員の徳田誠志氏と久闊を叙した。その折、徳田氏から一枚の神像写真を示され「地元では延喜年間頃の作品ということだが」とコメントを求められた。見れば、一木造の女神像で延喜年間はともかくかなり古い像であることに驚いた。通常、神像は宗教的な理由から非調査、非公開の対象であることが多い。見たことのない作品でもあり、場所を尋ねると愛知県岡崎市だという。徳田氏からは調査の希望もあり、こちらもはやる気持ちをおさえながら昨今の仏像の盗難事情や未公開の神像彫刻であることもあって、あいまいな返事を返した記憶がある。

帰阪後、『新編岡崎市史』美術工芸編^①を一瞥したが、当該の女神像は掲載されていなかった。のちに国立国会図書館ウェブサイト「近代デジタルライブラリー」に土屋彦吉編纂『三河国碧海郡和志取神社史』（和志取神社社務所・明治四十三年二月）が収められており、そこには件の神像

の写真が掲載され、全くの新出資料ではないこともわかった。

しばらくして後、再び徳田氏から連絡があり、神像は愛知県岡崎市西本郷町字御立に所在する和志取神社に所蔵される像で、和志取神社での宝物曝涼の機会に調査することが可能であるとのことであった。そこで平成二十三年七月二十四日に徳田氏と共に現地に赴いて調査を実施した。本稿では、和志取神社所蔵の神像調査の概要報告とそれに関わる近代の「論社問題」についての若干の考察を行うことにしたい。

なお、現地調査にあたっては徳田氏のほか、宮内庁非常勤陵墓守部の土屋宣彦氏、また和志取神社宮司神谷仁子氏ならびに同氏子の皆様に多大なご高配を賜った。ここに記して深謝申し上げたい。

一 和志取神社蔵女神像について

まずは神像の概要から記したい。像高は、現状で二八・四センチをはかる坐像である^②。髪は髪際線を刻んで側方で左右の耳を覆う。髪は平彫りとする。彫眼。內衣は左衽にゆったりと着し、その上からゆったりと外衣をまとう。外衣の端を一段折り返して立てる（背面部で七ミリ）。衣文は上腕左右に大きく簡略に刻む。顔を正面に向き、口を閉じる。右手

は垂下して膝の上に置くようで、左手は肘を曲げて胸前に向けるようであるが、左右手とも肘先から先を失い、正確な手勢は不明である。

構造は、木心を像底中央後方にこめた広葉樹（クスノキか）の一本から像全体を彫り出し内刳りは施されていない。像底部左側に朱漆で「和志取神像」と記すが後世の追銘である。頭頂部は切除あるいは虫損のため、現状では扁平になっている。また両手先欠、右膝部を中心に大きな欠損部、膝中央部は木目に沿ってV字状の材の欠損が認められ、全体に虫喰いも著しく保存状況は良好とはいえないが、当初の姿を十分にうかがうことができる造形である。

本像と比較すべき類例は少なく判断に苦しみところであるが、式内社研究会『式内社調査報告書』^③では、鎌倉時代末期から室町時代頃の製作とされている。女神像をみると肩幅、体幅がともに広く、なおかついわゆる「なで肩」にはなっていない。両腕外側のラインもほぼ垂直に降りた上体となっており、それを扁平な膝が支える造形となっている。肩幅を大きくとり、そこに着衣をゆったりと纏って外衣はややずらせたような着衣法はあまり中世期の作例では見かけないように思え、また手勢は右手を膝上に置き、左手は肘を曲げて胸前近くに持つてくるが、中世以降の女神坐像では拱手あるいは左手を膝上に置く像が多く、このような手勢は中世では珍しい。また本像では膝前に衣文を刻まないが、こうした特徴は平安時代後期の一木造の神像彫刻とも共通する。加えて膝が左右に大きく張り出さないこともその特徴として掲げられる。像底の形状は円弧を描いたように像前方へと伸びている。

以上の特徴からみれば鎌倉時代から室町時代頃よりも古い要素をもつ

た神像といえ、ここでは、ひとまず平安時代後期の製作とみておきたい。

二 神像の発見

神像の発見は、冒頭に掲げた明治四十三年（一九一〇）刊行の土屋彦吉編纂の『三河国碧海郡和志取神社史』（以下『社史』）に詳しく記されている。当該部分を以下に掲載する。

明治貳拾年内務省地誌御編製の事あり。神職川喜田庄次郎翁、此事に従ふ。また貳拾壹年四月九日本郷村和志山の蓮華寺古蹟を云作中本郷の蓮華寺は古の養王寺といへり

古器物を調ふのに古像あり。見るに仏像にあらず最古き神像なりと認め御像の脚部をみるにいとふるき朱うるしを以て和志取神像の五文字ほのかに見ゆ。是を識者にみするに古書に延喜五年に諸社之神像を造るとあり必ず其代のものならんと云ふ。又内務省地誌係の官人岸上某に見するに延喜の頃の製なりといふ。此由を官に訴へゆるしを蒙りて和志取神社本殿に鎮め奉りぬ

これによれば、明治二〇年（一八八七）に内務省による地誌編製事業があり、和志取神社神職の川喜田庄次郎が従事した。また明治二十一年四月九日に行われた蓮華寺の宝物調査の折、仏像ではなく古い神像が所蔵され、脚部に朱漆で「和志取神像」と書かれていた。そこで識者に見せると延喜年間の作品であると言われ、また内務省地誌係岸上某からも同様の判断が下されたため、その旨を官（愛知県）に申し出て、和志取神社本殿に安置したとある。『社史』には、明治二十一年五月四日付で氏子総代と神職川喜田庄次郎の連名で愛知県知事勝間田稔あてに提出され

た「神像発願届」と「神像発願二付本祠へ鎮座ノ伺」の文面が掲載され、五月九日付で愛知県庁から申出の許可がなされている。許可書の文面には「古代ノ彫刻ニシテ真個稀有ノ物ナレバ内殿ニ鎮座スルハ勿論又請^{マツ}来保存方充分注意スベキ旨」と記されている。さらに神像は明治三十六年一月に愛知県訓令第四号「宝物及貴重ナル書画什器類管理規則」による「宝物」に認定されている。

以上の経緯から女神像は明治二十一年の蓮華寺宝物調査によって発見され、和志取神社に移坐されたことが知られる。明治二十一年の宝物調査といえば、岡倉天心やフェノロサが関与した臨時全国宝物取調局による杜寺宝物調査を想起するが、宮内省に臨時全国宝物取調局が設置されたのは同年九月二十七日のことで、蓮華寺宝物調査は蓮華寺あるいは地域独自で実施された宝物調査であつたと推測できる。

割注に「古の薬王寺」であるとされた蓮華寺は、和志取神社から北西五〇メートル離れた西本郷町和志山にある寺院で、宮内庁管理の御陵墓である「五十狭城入彦皇子御墓（和志山一号墳・全長六〇メートルの前方後円墳）の後円部に隣接している。現在は曹洞宗に属しているが、寺伝によればもと和志王山薬王寺と伝え行基作の薬師如来像を安置し創建した寺院で、建武二年（一三三五）の矢作川合戦の際に焼失、享禄二年に再建し、蓮華寺と改めて今日に至るとされる。また『新編岡崎市史』美術工芸編によれば、和志王山薬王寺は和志取神社の別当寺であり、建武二年の焼失の際、仏像は和志取神社境内に大日堂を立てて安置したといい、明治の神仏分離に際して蓮華寺に移され、明治二十四年に神社の東隣に堂宇（大日堂）を建てて仏像を移したと記されている。『岡崎市

史』美術工芸編の内容は『社史』にも記載されており、大日堂のほかに阿弥陀堂もあつたらしい。和志取神社境内には現在も三間四方の宝形造の堂宇があり、また道を挟んだ東隣には「大日堂」があつて旧本地仏として金剛界大日如来坐像、聖観音菩薩立像（ともに市指定文化財）のほか善光式阿弥陀三尊像などを安置している。

蓮華寺あるいは薬王寺についてはこれ以上の事項は未詳ながら、少なくとも地元では蓮華寺発見の女神像が和志取神社関係の遺品であり、発見後、同社へ移坐させたことも十分理解できるものである。

さて、『社史』では神像発見から移坐に至るまでの詳細な経緯を伝えるほか、和志取神社の関わる各種史料を多数採録しているが、『社史』の編纂は和志取神社の由緒を後世にとどめる以上に大きな目的をもって編纂されているとみられる。

『社史』内扉には『和志取神社史 附御陵墓由来并村誌』と別記され、神社にかかる事項のほかに五十狭城入彦皇子御墓の由来と本郷村に關係する事項を付記する。編纂は御陵墓伝説地監守である土屋彦吉が担当し、巻頭には愛知県知事深野一三による題字や熱田神宮司角田忠行の和歌を掲載し、大審院判事で帝国古蹟取調会理事を務めた中田憲信が考証を、また校閲を後年中国哲学者となる文学士山口察常が担当するなど、当時の錚々たる顔ぶれが並ぶことから『社史』が単なる神社の由来書でないことは明らかである。

跋文冒頭には、「式内和志取神社柿崎村にありと近年編製の某書に載せあれとも確証とすべきものにあらず只鷲取の地名あるより白山社をして和志取神社と強て附会したるなるべし本郷村和志取神社は以上列記する

考証に徴し」と記されており、式内社和志取神社の所在地に関する考証書としての性格が強い。跋文中の「近年編纂の某書」とは、明治四〇年九月刊行の大久保芳太郎（芳治）編纂・中尾豊次郎発行の『和志取神社誌』^④（以下『社誌』）を示すものとみられる。

『社誌』跋文には、『参河国官社私考』が世に出てから、式内社である和志取神社の所在地をめぐって争いが生じ「預れる官人等もほどほどにあつかひなやみて」といった状況のため『社誌』を編纂したと記している。つまり『社史』は、式内社和志取神社の所在地をめぐる問題について柿崎村側が刊行した『社誌』に対する本郷村からの反論書とも理解される。『社史』は発行日こそ明治四十三年二月ながら、冒頭に掲げた中田憲信による「考証」や凡例は明治四十一年一月の日付をもち、『社誌』刊行後ただちに土屋彦吉が『社史』の編纂に携わったことがうかがわれる。『社史』・『社誌』の編纂は近代における式内社和志取神社の所在地をめぐる争い、いわゆる「論社」に関わる本郷村・柿崎村からの意見書とみることができ、そうした状況のもとで神像が発見されたことが理解できる。そこで、次章では式内社和志取神社をめぐる論社についてみてみることにしたい。

三 論社問題

「論社」とは、複数の神社が式内社と称し、いずれが正しい式内社の後裔社であるのか諸説の一致をみない場合、各候補社を示す用語である。^⑤ここでは、各候補社が式内社を主張し争議になることを「論社問題」と

呼ぶことにする。

「和志取神社」は『延喜式神名帳』に「碧海郡 六座並小和志取神社」と記された式内社であり、『参河国内神名帳』^⑥にも「正五位下鷲取天神坐碧海郡」と記されている。この記載からは和志取神社（鷲取天神）が三河国碧海郡に所在することは確実だが、後裔社については未確定のままであり、このことが江戸時代後期以降、「論社問題」を引き起こすことになる。

式内社の後裔社を確定する作業は、中世や近世前期においてはさほど問題にはならなかったが、近世後期に入ると国学の発展につれて、国学者らによる考証書の成立、あるいは地域に所在する個々の神社での式内社意識の高まりを受けて活発化することがすでに指摘されている。^⑦

和志取神社の場合、享保十八年（一七三三）の出口（度会）延経『神名帳考証』^⑧によれば、「和志取神社 今云鷲塚村」と記すものの、文化一〇年（一八一三）伴信友『神名帳考証』（『神名帳考証土代』）^⑨では、「〇式社考云、或云、鷲取^{とモ}天神、明神、〇守山氏云、本郷村ニアリ、〇鷲塚村ニ天満天神ト云フ社アリ、又鷲塚新田ト云フ處モアリ」と述べて、候補地として本郷村・鷲塚村などをあげている。

さらに三河国寺津・寺津八幡社の神職で国学者でもある渡辺政香が天保七年（一八三六）に著した『参河志』^⑩では、種々の史料をひき「長谷部村今は本郷と云鷲取天神とて壹間四方瓦葺小祠有赤木鳥居^{（附）}松三株あり喬樹なり今根株のみ残れり是鷲取の神社か姓氏録に依れば御館村の神社と思はる」と本郷村説を支持している。^⑪

なかでも三河吉田・羽田八幡宮宮司で国学者である羽田野敬雄が記し

た『参河国官社考集説』（天保一〇年・一八三九）¹²は諸本諸説をそれぞれ引いて詳細を極めている。同書では和志取神社を「社地未考」とし、その候補地として賀茂郡御館村神明社（現豊田市御立町）、鷲塚村天満宮（現碧南市鷲塚町）、高鳥村（現高浜市向山町）、北柿崎村白山社（現安城市柿崎町）と本郷村本郷大明神（現岡崎市西本郷町御立）を掲げている。なかでも本郷村については渡辺政香曰くとしたうえで「本郷村^{長谷部ト云ハ}蓮華寺ノ傍ニ一間許ノ小社アリ、三圍許ノ古松三四株有テ舊地也、コレヲ鷲取天神トイフト其村人云リト云イ」と記し、また羽田野自身も天保

八年二月に本郷村を訪れ「本郷大明神ノ西五六町許ニ蓮華寺トイフ禪寺アリ、ソコヨリ北ノ方一町許ニ、其領主ノ陣屋アリ、ソノ後ノ少シ小高キ処ニ天王社アリ、社ハ二間四方許ノ小祠ニテ、古松二本アリ、彼庄屋塚ト云モアリ、神座ノ下小高ク大石ヲ据エタリ、古社歟」とし実際に現地にて確認作業を行っている。さらに三河岡崎・長瀬八幡宮神主板倉政方の言として「海道宇頭村ノ北柿崎村ニ、字ハ和志取トイフ処アリ、其所ニ白山社アリ、社ハ一間許ノ小社ニテ、境内ハ除地ニテ古松大樹等アリ、（中略）可考トイヘリ」と柿崎村説も取り上げ、「近キ年社地ノ入口ニ、二十六座内和志取神社トイフ標石ヲ立タリ」と記している。なかには「舊クハ入海ナルベシ」（鷲塚村天満宮）とした候補地もあった。

明治二〇年代後半に栗田寛によって編纂された徳川光圀『大日本史』神祇志卷六卷（卷二五五志十二）では、式内社和志取神社の所在を「国内帳作正五位下鷲取天神、今在柿崎神社、社傍有称和志取地、按上文狹投社所在、又曰和志取峯、本社蓋與之有縁故、神名帳頭注云、狹投和志取二神兄弟也、考姓氏録、大碓命異母弟五百城入彦命、御立史之祖、而

其族世居本郡、拠此本社豈祀五百入彦歟、附以備考」として和志取峯とする猿投社を排して柿崎村に比定している。

このように江戸時代後期から明治にかけて式内社和志取神社の所在地については、地名や社祠等に基づく諸説あつて定まらず、特に本郷村本郷大明神と北に二キロほど離れた柿崎村白山社とは式内社和志取神社の有力な候補地であつたことが理解できよう。

四 『特選神名牒』の編纂

式内社和志取神社を巡る論社問題は未決着のまま、明治維新を迎える。慶応四年（一八六八）三月二十八日に「神仏判然令」の太政官布告がなされ、全国各地で廃仏毀釈の嵐が吹き荒れるなかで、明治政府は祭祀すべき神々の体系化、いわゆる「社格制度」の制定を進めていく。その準備作業として明治二年六月一〇日の太政官達書では、全国の府県に対して式内社・式外大社、崇敬社等に関する調査記録の作成を命じている。しかしながら調査は困難を極め、翌明治三年二月二十九日には次のような布告が出されている。

延喜式神名帳所載諸国大小ノ神社、現存ノ分ハ勿論、衰替廢絶ノ向、式外ニテモ大社ノ分、或ハ即今府藩県側近等ニテ、崇敬ノ神社取調可届出ハ兼テ御布告ノ通りニ候處、差向キ官幣神社ノ分詳細取調当九月カギリ無違滞神祇官ヘ可届出候事、

但シ各社同名所在混雜不分明ノ社ハ精々遂穿鑿、其上難相分向ハ巨細書ヲ以テ同官ヘ可伺出事、

ここでは、論社となる神社はそれぞれ精査を求めそれでもなお決し難い場合はその委細書を神祇官へ提出することとされた。同年秋にも同様の調査を命じる布告が出され、ようやく明治四年五月十四日に太政官から「神社改正一条」が布告された。「神社改正一条」では、全国の神社を官幣社・国幣社、府藩県社、郷村社、無格社に分類し、それぞれの「社格」が定められた。しかしながら、論社となった式内社などは「神社改正一条」からは除外、無視されたのである。

「神社改正一条」布告後、教部省（神祇官の後身）では式内社における論社等による遺漏を危惧したようで、明治七年四月一〇日付の教部省から太政官へ提出された伺書には以下の記述が認められる。

去ル辛未年中神社一般御改正、官国幣社以下夫々社格御治定被仰出候處、(中略) 所謂延喜式内并国史所載ノ古神社ノ如キモ中世以来衰頹、且無氏子等ノ分ハ右府県郷村ノ社格ニ入ラズ漏レテ員外タリ。夫其社格ナキモノハ自ラ保全ノ道モアラザレバ、数年ノ後竟ニ湮滅ニ属セムハ必然ノ勢ニテ甚遺憾ノ事ニ存候。

ここに「神社改正一条」の遺漏を補うべく新たに『特選神名牒』の編纂が進められることになり、同年五月二十二日に『特選神名牒』の編纂が許可されている。当初の計画案にあった宮中神殿での遥祭と社地保存の可否は保留され、また府県への調査命令は太政官からではなく教部省布達することになったが、六月二十九日付で教部省から府県に対して、管内式内社と国史所載社の調査を求め九月末日までに報告するよう求めている。そこには次の文言があり、論社問題への解決に対する教部省側の強い意志が読み取れる。

今般於当省神名帳纂定イタシ候條各管内延喜式内并国史見在ノ神社ニテ、当今其所在未定、或ハ社地埋埋ノ分ハ無遺漏搜索檢覈イタシ、毎社考証書及絵図面ヲモ相添可差出、

しかしながら『特選神名牒』の編纂は、「神社改正一条」で未解決となった神社に対してより詳細な報告を求めたために困難を極め、未提出の府県が続出し、明治九年八月になっても尚難航していたが、翌年一月には教部省が廃止されることになったため、三重県など調査未了の地域を残しつつも明治九年十二月に『特選神名牒』は一応の完成をみたのである。

五 式内社和志取神社

さて、こうした中央政府の状況をもとに再び和志取神社の論社問題についてみてみることにする。まずは柿崎村側の『社誌』からその経緯をたどってみたい。

明治七年五月、和志取神社（柿崎）へ愛知県庁から通達が来る。通達の内容は、「西本郷村長谷部神社今般教部省之指令ニヨリ式内廿六座之内和志取神社確定候」とあって、西本郷村長谷部神社を式内社和志取神社に確定したとの旨であった。通達は、「和志取神社」の社号変更だけでなく「二十六座内和志取神社」と記された標石も改めるよう指示があった。県からの通達は『特選神名牒』の教部省布告よりも早く出されたが、この事情は後述する。

驚いた柿崎村民は、旧来通り「和志取神社」と称することを県に請願

する。六月には改めて愛知県より指令があり、「神璽ヲ初古塚等ニ至マデ古来確証ト可相成廉々不少候」によつて西本郷長谷部神社を「和志取神社」と確定したが、柿崎村では社号を変更するには及ばないが、標石の「二十六座内」(式内社)の文字は削除するように指示がなされた。愛知県が「式内社和志取神社」を西本郷村和志取神社に確定した理由は「神璽」「古塚」などの物証であつたことがわかる。

七月には再び柿崎村から愛知県へ請願がなされた。その内容は(1)長谷部神社が和志取神社に確定した際に物証となつた神璽そのほかの証拠を再確認することへの許可、(2)柿崎村の田畑の字名に「鷲取」とあるなどの根拠から「式内社」としており、社号が同じながら柿崎だけ「式内社」の文字を削除するのはなぜなのか、(3)長谷部神社は往古「瀬部大明神」と称し、文政年間には「本郷大明神」、明治三年には「長谷部神社」とたびたび改称しており、今新たに「式内和志取神社」と改めるのは真の和志取神社ではない証なのではないかとの三点であつた。

(2)・(3)については柿崎村側から西本郷村への疑義・反論であるが、(1)については認められ、八月二〇日には検査官とともに西本郷村に出向き、長谷部神社内殿にある「神璽杉板」(長さ七寸、千鳥六羽を刻む)、虫食いのある素扇、古塚由来記などを拝見し、「皆和志取神号ノ微トスルに足ル者無シト看做ス」として、八月二十三日に県へ改めて具申を行っている。

こうした争議の事情は愛知県から教部省へ報告がなされていたのである。翌明治八年二月には教部省から柿崎、西本郷村双方に対して、西本郷「和志取神社」を「長谷部神社」と旧社号にもどすこと、また「和

志取神社」は「式内未定之神社」とする旨の通達があつた。柿崎村和志取神社では社号は保てたものの、式内社和志取神社は「式内未定之神社」となつたのである。

明治九年八月に一応の完成をみた『特選神名牒』和志取神社の項には以下のように記された。

今按本社所在柿崎西本郷鷲塚高取四村にて互ひに式社を争ひ或は鷲取山又はわしとりの地名ありわし山ありと云は確証あるにあらず地方官にて取調べしに(中略)何れも偽妄顯然たり又鷲塚村なるは検地帳にわし山とありと云ひ村名を鷲塚と云るのみにてもとより和志取の語といと遠ければ信がたし唯柿崎村なる神社地にわしとりの字五ヶ所あり宮の根宮の西宮の北神田など名宝暦四年田畑名寄帳に記せるもの証とするに足れり猶よく考えて定むべきなり

以上の柿崎村の動向に対して、『社史』から西本郷村側の対応を見てみたい。

明治六年に、愛知県から鷲取権現の祭神である「氣入彦命」は長谷部神社の祭神「五十狭城入彦命」と同神であることから長谷部神社に併せて奉るよう「御沙汰」があつた。鷲取権現は『参河国官社考集説』によれば蓮華寺傍の「其領主ノ陣屋アリ、ソノ後ノ少シ小高キ処二天王社」にあたる。

『社史』では「御沙汰」の発信者を記していないが、これは明治六年三月に出された愛知県布達^⑤に関わるもので、「御沙汰」(指示)も愛知県によるものと推測できる。明治六年の愛知県布達は、郷村社をはじめとする官許を受けて創建した神社を除き私的に建てた祠は全て破却を命じる

もので「人家ノ屋敷内ニ有之社モ同様ノ事」いう厳しい内容であった。式内社和志取神社の候補地でもある鶯取権現（天王社）が「其領主ノ陣屋アリ、ソノ後ノ少シ小高キ処ニ天王社」であるために、愛知県布達による破却から逃れるために県から出された「御沙汰」と解せよう。既に中央政府（教部省）では「神社改正一条」制定にあつて論社となる神社に対して詳細な調査が求められていたが、式内社和志取神社の有力な候補地である鶯取権現（天王社）を愛知県布達によって破却することは出来ないためその回避措置として長谷部神社に併せて奉るよう「御沙汰」を下したものと推測する。

そこで神璽を長谷部神社へ移し、村民は「式内官社ノ最モ尊フトキ事ヲ知り」、同年（明治六年）に氏子総代より「和志取神社」公称の儀を教部省へ上申した。その後、調査を経て「神璽ヲ初古塚等ニ至マデ古来確証ト可相成廉々不少候」となり、明治七年五月に愛知県から長谷部神社を「教部省の指令に因り」式内社和志取神社に確定したとの指令を受ける。つまり鶯取権現（天王社）の祭神を長谷部神社に合祀するよう県からの指示があつて、それを受けて「和志取神社」公称の儀が地元から教部省へ出され「式内社和志取神社」として許可されたことがわかる。その後、六月二十九日付で教部省から愛知県に対して『特選神名牒』編纂の指示が下る。

愛知県の一連の動きは、明治六年の愛知県布告に対応する形で、県が独断で論社問題となつている式内社和志取神社を処理しようとした意図があるようにも思えるのである。

しかし先にみたように柿崎村からの猛烈な抗議を受け、明治八年二月

には旧社号「長谷部神社」に戻すとの教部省からの指令を受ける。『社誌』では、これを教部省からの再議の指令によるものだとしている。『社史』からは「正史に著しき神社をわし陷正史に拠る所なき不確の神社柿崎村元白山社を採用せらるゝに至りては神明に対し奉り神祇崇敬の實断ち難し」と憤慨の念がうかがえ、再び県へ請願を行った。その結果、編纂された『特選神名牒』では、和志取神社は「式内未定之神社」となった。明治十二年一月には「式内神社御調査」が済むまで長谷部神社を「未定式社和志取」神社と称することを認めるように県へ願ひ出て（『社誌』）、同三月には長谷部神社を「和志取神社」と称することが認められている。

しかし和志取神社が「式内未定之神社」であることは変わらず、明治四〇年一〇月には柿崎村、西本郷村双方の「和志取神社」が神饌幣帛料共進社に指定されている。こうした争議のなか、明治四〇年九月には柿崎村が『社誌』を刊行し、翌年一月には本郷村が『社史』を編纂するに至る。なお現在も柿崎村、西本郷村双方が「和志取神社」と称しており、今日でも論社問題については未解決のままである。

以上、明治期の和志取神社における論社問題についてみてきたが、論社問題は、なにも和志取神社一社に限ったことではない。『社誌』には、近年高木村（現安城市高木町）と下中島村（現岡崎市下中島町）との間で「式内社 日長神社」を巡つて争い、また宮地村（現岡崎市宮地町）と渡刈村（現豊田市渡刈町）との間で「式内社 糟目神社」を争うなど「昔此争無リシニ独近年ニ至テ紛紜タルハ何ゾヤ」と嘆いている。日長神社に関しては、『碧海郡誌』に「明治以来官の允許を得て式内日長神社と標セリ」とした下中島村・日長神社であるが、同書では高木村・日長神社も

明治初年に村民が式内社日長神社を具申したが教部省より「式内未定社」の通達を受けたとする。糟目神社についても、渡刈村では明治一、三年頃に独自に官による調査を行い式内社の是認を受けたが、宮地村からの反発があったようで旧額田県の命令により渡刈村を「糟目春日神社」、宮地村を「糟目犬頭神社」にそれぞれ改称させられている。

教部省や府県が近代社格制度の遺漏を補うべく論社問題を解決したい意向を示せば示すほど、論社問題は活発化し、その結果「式内未定社」が増加する結果になるというのは、なんとも皮肉な結果のようにも思えるのである。

おわりにかえて―物証としての文化財

最後に神像について話をもどして、おわりにかえたい。

神像の発見は、これまで見てきたように式内社和志取神社にかかる論社問題のなかで発見された。『社誌』に見る柿崎村側の根拠は、文政年間頃までは奥宮にあったとする時期不明の石碑や慶応二年に建立した石標をかかげるものの、一貫して地名（字名）考証によるものであった。それに對して西本郷村は地名考証のほか、その根拠に「神璽」「古塚」など、いわゆるモノ（「文化財」）に求めた点が大きく異なる。このことは教部省や愛知県が西本郷「長谷部神社」を式内社和志取神社に確定した根拠を「神璽」「古塚」などに求めた点とも符合している。つまり柿崎村が江戸時代後半以来縷々議論になってきた地名（字名）考証に大きく依拠したのに対して、西本郷村は地名（字名）考証という文献資料に加えてモ

ノ（「文化財」）によって裏付けようとしたのである。

「神璽」とされた「神璽杉板」「素扇」「古塚由来記」などは柿崎村民によつて「皆和志取神号ノ微トスルに足ル者無シト看做ス」とされたが、そうした状況にあつても西本郷村はさらにモノ（「文化財」）にこだわった。明治二十一年の蓮華寺宝物調査もさらなる物証を得るための調査であつたのだろう。この調査による神像発見は、大きな手掛かりであつたにちがいない。像底に朱漆で記された「和志取神像」の文字も後世（あるいは発見時）の所作であろうが、西本郷村にとつて大きな物証を得たことになる。こうした文献資料と物証（「文化財」）の両者を結びつけ歴史的事実を明らかにしようとする姿勢は、極めて近代的な手法といわねばならない。結果的に「式内未定之神社」になつたとはいえ、西本郷村のこうした姿勢は近代国家をめざす官（中央政府・愛知県）に對して大きな信頼を得ることになつたものと思われる。『社史』巻頭に愛知県知事深野一三による題字が掲載されているのもこうした事情の表れかもしれない。

モノ（「文化財」）の力は、もうひとつの物証である「古塚」にも大きく影響した。『社史』によれば、明治二十九年十一月に「古塚」が宮内省から「御陵墓伝説地」に指定され、現在は「五十狭城入彦皇子御墓」として指定されている。『社史』にも「附御陵墓由来」を掲載され、神像発見は陵墓指定にも大きく影響したものと思われる。「陵墓指定」にかかる経緯も論社問題と併せてみるとたいへん興味深いが、既に徳田氏の論考¹⁶があり、「古塚」の経緯についてはそちらを参照されたい。

注

- ① 新編岡崎市史編集委員会『新編 岡崎市史』十七「美術工芸」（新編岡崎市史編さん委員会 一九八四年）。
- ② その他の法量は次のとおり。（単位センチ）

髪際高	二六・六	頂 顎	八・六
髪際・顎	六・九	面 幅	六・二
髪幅（耳張）	六・九	面 奥	七・六
胸厚（含衣）	八・六	腹 厚	八・四
膝張（現状）	二二・九	膝高（左）	五・六
膝高（右現状）	六・三		
- ③ 式内社研究会『式内社調査報告書』第九卷「東海道4 参河・遠江・駿河」（皇学館大学出版部 二〇〇〇年）。
- ④ 『和志取神社誌』も国立国会図書館ウェブサイト「近代デジタルライブラリー」に所収されている。
- ⑤ 『国史大辞典』（吉川弘文館）「式内社」の項。
- ⑥ 三橋健『国内神名帳の研究資料編』（おうふう 一九九九年五月）所収。
- ⑦ 渡部圭一「式内社・論社問題における書物と『口碑』」『書物・出版と社会変容』二号（『書物・出版と社会変容』研究会 二〇〇七年一月）。
- ⑧ 皇典講究所編纂『神祇全書』第壹輯（神宮奉斎会 一九〇六年十月）に所収。
- ⑨ 神道大系編纂会『神道大系』古典註釈編七「延喜式神名帳註釈」（同会 一九八六年三月）。
- ⑩ 渡辺政香『参河志』（愛知県幡豆郡教員協会 一九三三年十一月）。
- ⑪ 『社誌』では、渡辺政香の本郷村説に対して「政香の説は杜撰の評を免がれず書上は贋物偽造の疑團を免れず」と非難しているが、もちろんバイアスがかかった言説である。
- ⑫ 神道大系編纂会『神道大系』神社編十五「尾張参河遠江国」（同会 一九八八年十二月）所収。
- ⑬ 「式社并式外大社或ハ府藩県崇敬ノ社并勅願所ノ分由緒社伝御奉納物等巨細録上セシム」。以下の動向については、『特選神名牒』（磯部甲陽堂 一九二五年）に所収の「特選神名牒編纂次第」による。なお各布告、通達、伺書類については、国立公文書館デジタルアーカイブ「太政類典」で確認することが出来る。
- ⑭ 『参河国官社考集説』にみる「近キ年社地ノ入口ニ、二十六座内和志取神社トイフ標石ヲ立タリ」とした標石（慶応二年夏建立）である。現在も集落の入口にあり、「延喜式□社二十六座内 和志取神社」と刻む。□部分は方形に彫りくぼめられ内部に「神」字を刻む。なお現在、境内傍には明治三十五年九月建立の「村社 式内 和志取神社」（但し「村社」の文字は埋められている）の標石が立つ。
- ⑮ 『愛知県布達類集 明治4〜8年』（一八七六年五月）五八八頁。なお本資料も国立国会図書館ウェブサイト「近代デジタルライブラリー」に所収されている。
- ⑯ 徳田誠志・清喜裕二「五十狭城入彦皇子墓の墳丘外形調査」『書陵部紀要』六十三号（二〇一二年三月）。



図1 和志取神社 女神像



図4 同 背面



図2 同 左斜め



図5 同 面部



図3 同 左側面



図7 同 面部左斜め



図6 同 面部左側面

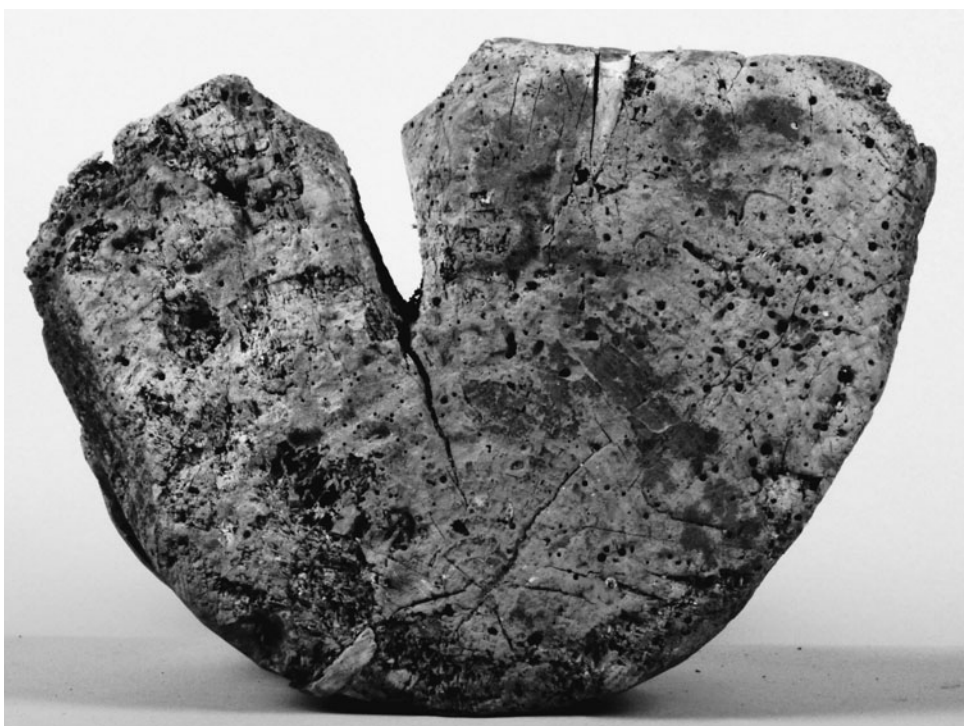


図8 同 像底